翻訳

アダム・スミス『道徳感情論』第Ⅴ部「慣習と流行が、道徳的是認と道徳的否認の感情に及ぼす影響について」

山本陽一（訳）

訳者はしがき

以下は出版社と編者の承諾を得て Adam Smith (2002) *The Theory of Moral Sentiments*, Knud Haakonssen (ed.), Cambridge University Press, pp. 227-247 を翻訳したものである。

本書全体の邦訳については、米林富男訳『道徳情操論』（一九六九年、未来社）、水田洋訳『道徳感情論』（二〇〇三年、岩波書店）を参照してほしい。本稿も上の先行業績に多くを負う。村井章子・北川知子訳『道徳感情論』（二〇一四年、日経ＢＰ）も参照した。

翻訳にあたり、原文にないが、訳者が本文に付加した諸点について。①各パラグラフに改行はないが、適宜これをほどこした。②引用符号「　」に相当するものは原文にないが、文意を明確にするため使用した。／や――についても同様である。③［　］内の語句は訳者の挿入である。

脚注について。アラビア数字は編者の、アルファベットはスミス自身の注を示す。

本書のタイトルと第Ⅴ部の目次は以下のとおり。

『道徳諸感情についての理論。あるいは、人間が、まずは隣人のふるまいと人柄について、そのあとわが身のふるまいと人柄について、自然に下す判断の基底にある諸原理を分析する一論考』

第Ⅴ部　慣習と流行が、道徳的是認と道徳的否認の感情に及ぼす影響について。ひとつのセクションから構成
第一章　慣習と流行が、美しさと醜さのとらえ方に及ぼす影響について
第二章　慣習と流行が、道徳感情に及ぼす影響について

第Ⅴ部　慣習と流行が、道徳的是認と道徳的否認の感情に及ぼす影響について。ひとつのセクションから構成

第一章　慣習と流行が、美しさと醜さのとらえ方に及ぼす影響について

1　すでに挙示された諸原理のほかにも、世人の道徳感情に相当な影響を及ぼすものがあります。なにが非難に値し、なにが讃辞に値するかについて、多くの変則的で違和感をもよおす意見が、さまざまな時代や国民に広まりますが、そんな異説の主たる原因こそ、ここにいう原理であり、すなわち、慣習と流行です。これらの原理は、あらゆる種類の美しさについてわたしたちがくだす判断に支配圏を広げます。

2　ふたつの対象がしばしば一緒にすがたを見せていたら、想像力は、一方の対象から他方の対象へと、すんなり移動する習慣を身につけます。わたしたちは、最初の対象が目に映ると、つぎの対象がつづいて現れるのが当然だと期待します。これらの対象は、

ひとりでに相手方のことをわたしたちに想い起こさせ、ついには興味関心が楽々とそれらを駆けめぐります。

慣習から独立した真の美しさがふたつの対象の結合に介在しなくても、こんなふうに慣習がふたつの対象をひとつに結びつけてしまえば、両者が離れ離れであるのは不適切だと感じられます。一方の対象がふだんの同伴者を連れずにすがたを見せると、ぎこちなく思われ、わたしたちは、見つけられると期待したものが不在であるのを残念に思います。そんな失望は、観念がいつもの習慣によって編制されることを邪魔します。たとえば、ひとそろいの衣装をみて、それにいつもくっついている飾りが欠けていれば、それがどんなにつまらないものでも、なにか物足りないように思われ、欠けているのが腰ボタンひとつでも、わたしたちはそれをどことなく俗っぽいとか野暮くさいと判定します。

対象の結びつきに自然な適切さがあると、それを適切だと感じるわたしたちの感覚は、慣習によって増幅されます。また、それと違う結びつきは、慣習によっていっそう心地わるく映しだされますが、慣習がなければさほどとも思われますまい。味わい深いものごとを見慣れた人は、不恰好なものや野暮なことにひときわ嫌気をもよおします。

対象の組み合わせに不適切さがあると、それを不適切だと感じるわたしたちの感覚は、慣習によって減退するか、すっかりそこなわれます。だらしなく散らかしていることに慣れた人は、端正とか風雅といった感覚をすべて失います。調度品や衣装の様式は、初めて見る人に無粋だと思われるものでも、使い慣れている人の気分を害することはありません。

3　流行は、慣習とは異なりますが、正確にいえば、むしろ、特別な種類の慣習です。流行とは、万人が着る服ではなく、高い地位の人、あるいは名望家が着る服です。上品で、堅苦しくなく、それでいて威厳がある上流身分ならではの作法は、その衣装がいつもながら絢爛豪華なこととあいまち、彼らがたまたま衣装にほどこす形にさえ気品を与えます。彼らがこの形を着用しつづけるかぎり、それは、わたしたちの想像のなかで、なにやら高級で豪華なものを示す観念とつながり、また、それ自体に異彩はなくても、このつながりのせいで、なにやら同じく高級で豪華な感じをただよわせるように思われます。彼らがその形を使わなくなると、たちまちそれは、かつて有ると映った気品をすべて失い、いまや下層身分の人びとだけに使われて、なにやらその人びとの俗っぽく野暮くさい感じをただよわせるように思われます。

七九

4　衣装と調度品が慣習と流行によって全面的に支配されるものだということは、世の中がこぞって認めています。しかし、これらの原理の影響は、けっしてそんな狭い分野にとどまらず、音楽、詩歌、建築など、ともかく審美眼の対象ならば何にでも広がります。

衣装と調度品の様式は、たえまなく変化しており、五年前に賞賛された流行も、こんにちでは無粋に映ります。ですから、わたしたちは経験によって、「その人気は、おもに、いや全面的に、慣習と流行のせいだ」と確信します。衣服と調度品は、さほど長もちする素材でつくられていません。意匠をこらした外套は、一年ですり切れ、それ以上長くつづけて仕立て時の原型を流行として広めることはできません。調度品の様式は、衣装のそれに比べてさほど急速には変わりませんが、その理由は、調度品のほうがふつう長もちするからです。しかし、五、六年もすると、一般にそれも全面的に一新され、だれでも自分の生きているうちに調度品の流行がめまぐるしく変わるのを目にします。

そのほかの生産技術から作られる品は、ずっと長もちしますし、佳作と想像されるならその出来栄えを流行としてずっと長期にわたり普及させられます。うまく工夫された建物は、何世紀も風雪に耐え、美しい旋律は、一種の伝統によって幾世代も脈々と伝承され、巧みに書かれた詩歌は、世界のつづくかぎり生きつづけられます。こうした作品はすべて長年絶えることなく、それぞれの制作の元になった特定の型、特定の趣向・流儀をはやらせつづけられます。

およそこれらの技術において流行が激変するのを自分の生きているうちに見られる人はほとんどいません。はるか遠くの時代や国民にあったさまざまな様式をずいぶん経験して知悉し、その奥深くに融けこめる人はほとんどいませんし、そんな様式を自分の生きている時代や国の様式と比べて公平に判断できる人はほとんどいません。ですから、およそこうした技術から作られる品の美醜について自分のくだす判断に、慣習や流行が大いに影響することを進んで認める人はほとんどいません。むしろ、人びとは、そんな各技術で守られるべしと自分が思う準則の根底には、ことごとく理性と自然があり、習慣や先入観はないと想像します。

しかし、ほんの少し注意してみれば、事実はその反対であることが納得され、また、慣習と流行が衣装と調度品に及ぼす影響は絶対的ですが、建築や詩歌や音楽に及ぼす影響も、それに劣らないことが得心されます。

5　たとえば、柱頭は、直径の八倍の高さの柱にはドリス式を、直径の九倍の高さの柱にはイオニア式の渦形を、直径の十倍の高さの柱にはコリント式の葉飾りを、それぞれ専用に使わなければならない理由が論定できるでしょうか。

そんな専用の使い方がそれぞれに適切である根拠は、習慣・慣習以外ではありえません。特定の比率と特定の装飾が結びつくのを見慣れたら、それらが組み合わされていないと目ざわりに感じられるでしょう。五つの柱式[1]は、それぞれ独自の装飾をもち、ほかの装飾と取り替えられると、建築上のルールを少しでも知る人なら、だれもがきっと目ざわりに感じます。

たしかに、建築家のなかには、古代人が各柱式に固有の装飾を割りあてた判断は絶妙であって、これに匹敵する似つかわしい別の判断は見出しがたいという人もいます。しかし、これらの様式がきわめて心地よいことはたしかでも、「それは上記の比率に適合しうる唯一の様式である」と考えるのはいささかむずかしく、むしろ、「慣習が確立する以前、同じく上記の比率にうまく適合していた別の様式は五百をくだらない」と考えるほうが自然であると思われます。

しかし、慣習によって建築上の特定のルールが確立したとき、それが絶対に不合理であるとまでいえなければ、これと同じ程度しか良くない別のルールに改めようと思うのは不見識ですし、これより性質が少しばかり風雅で美しい別のルールに改めようと思うことさえ不見識です。人前に出るとき、世間で着用される服とずいぶん違うものを着れば、その新しい衣装そのものがいかに上品であり、いかに便利であっても、からかわれるでしょう。家屋に装飾をほどこすときも同様であって、慣習と流行が定めた既定の流儀とずいぶん違うものに従えば、その新しい装飾そのものが世間一般の装飾よりいくぶんか優れていても、不見識であると思われます。

6　古代の修辞学者によると、詩のしかるべき韻律は、そもそも詩文の特定種類ごとに専用に使われるものでしたが、その理由は、詩文の種類ごとにもっとも優越すべき特徴・感情・情念が、韻律によって自然に表現されるからでした。彼らによると、ある詩体

（1）スミスが、「五つ」というのは、彼が名前を挙げる三つの古典的なギリシャの柱式に加え、ローマ人によって追加されたふたつの柱式、トスカナ式とコンポジット式も一八世紀には好まれたからである。五つの柱式は、パラディオ様式（Colen Campbell の *Vitruvius Britannicus*, 1715 を見よ）と、スミスの知り合いのアダムズ一家の新古典様式で盛んに用いられた。

は謹厳な作品に適し、また、別の詩体は陽気な作品に適し、両者を取り替えるとたまらなく不適切な感じがきっとすると考えられました。[2]

しかし、この原理は内容だけをみればきわめて確からしいと映りますが、当世の経験はこの原理と矛盾するように思われます。イングランド語の滑稽詩体は、フランス語では英雄詩体です。ラシーヌの悲劇とヴォルテールのアンリアードは、つぎの一文とほとんど同じ詩体で書かれています。

だいじな件ではあなたの助言をたまわりたい。

逆に、フランス語の滑稽詩体は、イングランド語では十音節からなる英雄詩体とほぼ一致します。慣習によって、一方の国民が謹厳・高尚・深刻さをあらわす観念に結びつけた韻律は、他方の国民が陽気で・ふざけた・滑稽な事々につなぎ合わせた韻律となりました。もしフランス人がアレクサンドロス風の詩体でつづる悲劇が、イングランド語で書かれるとすれば、これほど不見識に映るものはほかにないでしょうし、十音節の詩体でつづられる悲劇がフランス語で書かれても同様でしょう。[3]

7　卓越した技能の持ちぬしならば、その技能の各分野で確立した様式に変革をもたらし、文章、音楽、あるいは建築の新しい流行を持ちこもうとします。人あたりがよくて身分も高ければ、その人の衣装は人気を博し、どんなに独特で奇想天外でも、すぐに賞賛され、模倣されるようになります。しからば、名匠の独特な作風は、そのすぐれた技能によって人気を博し、その流儀は、彼がたずさわる学芸で流行の型になります。音楽と建築におけるイタリア人の趣味は、この五十年で大きな変化をこうむりましたが、それは、各分野の名匠の独特な作風が模倣されたことによります。

セネカは、ローマ人の趣味を堕落させた、つまり、りりしい理性と男らしい雄弁に代えて、軽妙洒脱な作風を持ちこんだとして、クィンティリアヌス[4]から告発されています。サルスティウスとタキトゥスも、ほかの人たちから、論調は違いましたが、セネカと同じ告発理由で問責されました。その言いぶんによると、彼らによって好評を博した文体は、この上なく簡潔・風雅・表情豊かで、詩情さえあるが、平易・素朴さ・本質を欠き、明らかに刻苦勉励の果てに生まれた衒学の所産でした。作家がこんなふうに自分の

欠点さえ心地よいものに変えられるには、どれだけ多くの才気をもたねばならないでしょうか。作家は、「国民の趣味を洗練した」とほめ称えられても、たぶんそのあとに、「国民の趣味を腐敗させた」という悼辞を頂戴するのが関の山です。

わたしたち自身の言語では、ポウプ氏とスウィフト氏がそれぞれ、長い詩型と短い詩型のあらゆる韻文作品に、それまで用いられていたのとは違う流儀を持ちこみました。バトラーの古めかしい作風は、スウィフトの平明さに道をゆずりました。ドライデンのとりとめなく気ままな作風、アディスンの正確だがしばしば冗長で平板なけだるさは、もはや模範とすべきものでなく、いまではすべての長い詩型の作品は、ポウプ氏のきびきびとして精緻な流儀に倣って書かれます。(5)

8　慣習と流行が支配権をふるう対象は、学芸の作品にとどまりません。慣習と流行は、自然物の美しさについてわたしたちがくだす判断にも同様のしかたで影響します。

事物の種類が違えば、美しいと思われる形体も多様で相反していますが、それはどんなものでしょうか。ある動物で賞賛される均整のとれたすがたは、ほかの動物で尊ばれるすがたと全然違います。事物はすべての分類ごとに、是認される固有の独特な形態をもち、また、ほかのどんな種類の美しさとも違う固有の美しさをもっています。

このような理由から、ジェズイットの識者ビュフィエ神父は、(6)「あらゆる対象の美しさの本質は、その対象が属する特定の種類の事物でいちばん普通の形体と色彩である」と断定しました。たとえば、人間の形体では、各部位の容姿の美しさは、しかるべき

(2) Aristotle, *Poetics*, 1459b31-1460a4 ; Horace, *Ars Poetica*, 73-98.

(3) 引用箇所は、ジョナサン・スウィフトの滑稽詩 'The Grand Question debated. Whether *Hamilton's Bawn* should be turned into a *Barrack* or a *Malt-House*' (1729) の第二句［Let me have your advice in a weighty affair.］であり、それが、ラシーヌの作品およびヴォルテールの *Henriade* の、十二音節からなるアレクサンドロス風の詩と対照されている。十音節の英雄詩体は無韻詩である。'English and Italian Verses' (in *EPS*) 参照。

(4) Marcus Fabius Quintilian (b. c. AD 35) *Institutio Oratoria* (AD 95), X. i. 125-31.

(5) Samuel Butler (1610-80), *Hudibras* (1663) で有名。John Dryden (1631-1700).

(6) Claude Buffier (1661-1737), *Traité des premieres vérités et de la source de nos jugements* (1724 ; 訳者無記名の英語訳、1780), I. 13.

中間点にあり、そこは、ほかの多種多様な醜い形体のいずれからも等しく離れています。一例をあげれば、美しい鼻は、あまり高くもなく、あまり低くもなく、あまりまっすぐでもなく、あまり鉤鼻でもありません。それは、これらの極端な形体すべてのあいだにある一種の中間点であり、どの極端な形とも違いますが、その差は、極端な形同士の差ほど大きくありません。この中間的形体こそ、自然がすべての鼻のなかで目標にしていたものと思われますが、もとより自然は、じつにさまざまなしかたで、この中間的形体から逸脱し、正鵠を射ることはほとんどありません。しかし、そんな逸脱はどれも、その中間的形体にとてもよく似ています。

手本を何枚も模写する場合、それらはすべて、手本をどこか捉えそこねているとしても、模写同士が互いに似ている以上に、手本と似ているでしょう。また、手本の一般的特徴は、すべての模写に脈打ち、そのなかでいちばん突飛で風変わりな模写は、一般的特徴から途方もなくかけ離れています。したがって、一般的特徴を正確に写しとる描写はほとんどないにしても、いちばん正確な描写といちばんずさんな描写は、ずさんな描写同士が互いに似ている以上に似ているでしょう。

各種の被造物にも同様なことがいえ、いちばん美しいものは、その種類ならではの一般的な骨格のいちばん強い特徴を帯び、そこに分類される大多数の個体ときわめてよく似ています。反対に、怪物、つまり、どこもかしこも醜い個体は、つねにきわめて突飛で風変わりであり、それが属する種類の大多数の個体とほとんど似ていません。

さて、以上が、事物の種類ごとに見られる固有の美しさですが、ある意味でこれほど稀少なものもありません。なぜなら、ほとんどの個体は、この中間的形体を正確に射止めることがないからです。けれども、それは、別な意味できわめてありふれたものです。なぜなら、この中間的形体を逸脱するすべてのものは、お互い同士が似ている以上に、その中間的形体と似ているからです。ですから、ビュフィエ神父によれば、各種事物のなかでいちばん見慣れた形体こそ、いちばん美しいものです。また、だからこそ、各種対象について思索する実践と経験をしかるべく積まなければ、その美しさを判断すること、つまり、中間的できわめて普通な形体の本質を知ることはできません。

ヒトという生物種の美しさについてどんなにみごとな洞察力があっても、花や馬など他の生物種の美しさを判断する助けにはならないでしょう。このように種が違えば美しさもさまざまであるのと同様に、風土が違い、さまざまな慣習や生活様式が成立する

場合は、同じ種である個体の大半が、環境の違いからさまざまな形態を授かり、しからば、形態の美しさについてさまざまな観念が広まります。ムーアの馬の美しさは、イングランドの馬の美しさと正確に同じではありません。

国民が違えば、ヒトの姿かたちや顔立ちの美しさについて形成される観念もさまざまですが、それはどのようなものでしょうか。ギニア湾岸では、白い肌は、胸がわるくなるほど醜いものであり、分厚いくちびると平らな鼻は、美の一例です。いくつかの民族では、肩まで垂れさがる長い耳は、あまねく賞賛される対象です。中国では、婦人が歩行に適するほど大きな足なら、醜い怪物とみなされます。北アメリカにいる野人のいくつかの民族では、子どもの頭に四枚の板を巻いて縛り、骨がやわらかくてしなやかなうちにこんなふうに頭を締めつけてほとんど真四角にします。

ヨーロッパ人は、このわけのわからない野蛮な風習に仰天します。この風習の盛んな民族がきわだって愚かなのはそのせいだと決めつけた宣教師もいます。しかし、彼らは、そんな野人をそしるとき、ヨーロッパの婦人たちがほんのつい数年前までほとんど一世紀にわたって、自然の美しいふくよかな体つきをほとんど真四角に変形しようと締めつける努力をしてきたことに想到しません。さらに彼らは、この風習が多くの捻転と疾病をひき起こすことは知られていたのに、おそらく世界史上もっとも文明化されたいくつかの国民にさえも、この風習が慣習により心地よくなっていたことを没却します。

9　以上が、美の本質について、この学識と天分をそなえる神父が示した学問体系です。それをふまえれば、彼は、美の魅力について以下のような見解であろうと思われます。「慣習は、特定の各種事物について、その種類ならではの習慣をこれまで想像力に刻印しており、美の魅力はすべて、個体がこの習慣に適合することから湧きあがる」。

しかし、外面的な美しさの感覚でさえ、その根底にあるのが慣習ばかりであるとは、わたしは信じる気になれません。どんな形体でも、それが役立つこと、つまり、形体が所期の有益な目的に適合することは、慣習から独立してその形体を勧告し、心地よくする明白な根拠です。

しかるべき色彩は、ほかの色より心地よく、初めて目にするときでもひときわ甘美な感じがします。なめらかな面はざらざらした面よりも心地よいものです。多様性は、冗長で単調な均一性よりも人を楽しませます。つながり合う多様性（Connected variety）

八五

――新たに生ずる各現象が、それに先行する現象によって呼びこまれ、その接合部分が、すべてお互いに自然な関係をもっているように思われる多様性――は、バラバラの対象が脈絡もなく雑然と集まる状態よりも心地よいものです。

しかしです。わたしは、慣習を美しさの唯一の原理と認めることはできませんが、この独創的な学問体系の真理を一定限度でなら認めてもかまいません。すなわち、はなはだしく慣習に反し、およそ特定種類の事物に見慣れてきたものと似ていない外形は、人を満足させるほど美しいとはいえず、また、慣習により旧態依然として支持され、その種類のどんな個体にも見慣れている外形は、人を不快にするほど醜いとはいえないということ、そこまでならば認めてもよろしい。

第二章　慣習と流行が、道徳感情に及ぼす影響について

1　どんな種類の美しさにかかわる感情も、慣習と流行によってこんなに強く影響されるのですから、ふるまいの美しさにかかわる感情が、これらの原理の支配をすっかり免れるという予想は立てられません。しかし、ふるまいの美しさにかかわる感情の場合、ほかのどんな美しさにかかわる感情よりも、慣習と流行の影響はずっと弱いと思われます。

おそらく、外界の対象の形体は、どんなにわけがわからず奇想天外でも、かならず慣習によってわたしたちの心に融けこみ、流行によって心地よくさえなりましょう。けれども、ネロやクラウディウスのごとき人物の人柄とふるまいは、慣習によってわたしたちの心に融けこむものではけっしてなく、流行によって心地よくなるものではけっしてありますまい。いつだってネロのような人物は、おぞましく憎らしい対象であり、クラウディウスのような人物は、ばかにされ嘲笑される対象です。

美しさの感覚は、想像をつかさどる諸原理によって決まりますが、これらの原理は、たいへん精妙で繊細な性質なので、習慣と教育によってたやすく変わります。しかし、道徳的是認と道徳的否認の感情の場合、その根底には、人間の自然本性にやどるきわめて力強く断固とした諸情念があるので、その道徳感情は、幾分ねじまげられるにしても、すっかりゆがめられることはありえません。

2　しかしです。慣習と流行が道徳感情に及ぼす影響は、所詮さほど大きくありませんが、しかしそれは、道徳感情以外のあらゆる対象に影響を及ぼす場合と瓜ふたつです。

慣習と流行は、正邪の自然的原理と波長があえば、感情の繊細さを研ぎすまし、悪に近づくすべてのものに対していまいましい感じを増幅させます。俗に言ういい仲間ではなく、真にいい仲間に囲まれて教育された人たちは、自分が敬愛し共に暮らす個人のなかに見慣れていたのは、正義・慎み・情け深さ・行儀のよさだけですから、それらの美徳が規定する準則に矛盾すると思われるどんなことにもひときわ心を痛めます。

これとは反対に、暴力・放らつ・虚言・不正義のただなかで成長する非運にあった人たちは、そんなふるまいが不適切だという感覚をすっかりなくすことはなくても、それがおぞましく凶悪だという感覚、また、それにふさわしい仕置きや処罰についての感覚をすっかり失います。彼らは、幼少の頃からそんなふるまいに馴染んでいて、それが慣習のせいで身についてしまい、ややもするとそんなふるまいをいわゆる処世術――みずからの実直さがあだとなって馬鹿をみないように、訓練しておいてよい、あるいは、訓練しておかなければならないことがら――とみなすきらいが強くあります。

3　流行もまた、しかるべき軽さの不躾には良い評判を与え、逆に、尊敬に値する資質には冷や水を浴びせることがありましょう。チャールズ二世の治下で、少々の放らつは、教養教育の典型的な特徴であると思われていました。それは、往時のとらえ方では、高潔無私、誠実、豪胆、忠誠と結びつき、「こんなふうに行動する人は、ジェントルマンであるが、ピュリタンでない」ということをしめす証拠でした。他方、厳格な作法と紀律正しいふるまいは、すっかり流行おくれになって、当時の想像では、えせ信心、狡知、偽善、田舎気質と結びつきました。

うわべしか見ない心にとって、上流身分の悪徳は、いつの時代にも心地よく思われます。そんな心にあって、上流身分の悪徳は、彼らならではの華々しい運勢と結びつくばかりか、そんな心が上席者の属性とみなす卓越した多くの美徳――自由と独立の気概、また、おおらかさ、高潔無私、情け深さ、優雅なふるまい――とも結びつきます。

これとは反対に、低い地位の人びとの美徳――倹約質素、刻苦勉励、準則の墨守――は、うわべしか見ない心にとって、卑しく

心地わるいと思われます。そんな心にあって、こうした美徳は、それらがふつう属する身分の俗っぽさと結びつくばかりか、そんな心がこれらの資質にふつう付きものだと思いこむ多くのひどい悪徳――たとえば、賤丈夫、臆病者、ひねくれ者、うそつき、こそ泥の心理的習性――とも結びつきます。

4　人びとの職業や暮らしぶりが違えば、彼らの精通する対象もずいぶん違い、そんな対象によって習慣として身につく情念もずいぶん違ってきます。ですから、そんな対象が人びとのなかにずいぶん違った人柄と気風を形づくるのは自然のなりゆきです。わたしたちは、各種の身分と職業に属する気風の何たるかを経験から教わり、それが少しはそこにあるのを期待します。

しかし、わたしたちは、各種の事物にあってその種類の中間的な形態にひとしおの満足感をおぼえます。なぜなら、それは、組成といい特色といい、自然が当該種類の事物のために打ち立てたと思われる一般的基準に寸分たがわず合致しているからです。しからば、各種の身分――妙な言いかたですが、各種の人間――にあって人柄が、人びとに固有の生活条件と境遇に通常伴う水準より強すぎることも弱すぎることもなければ、わたしたちの満足感はひとしおです。「人はその商売、職業の風情をもつべし」という言いかたをわたしたちはしますが、どんな職業でも専門家ぶることは見苦しいものです。

同様の理由から、人生のさまざまな時期は、違った気風を割りあてられています。老年期に期待されるのは、謹厳で物静かな感じです。この時期に心身がおとろえ、人生を長く経験し、感受性が鈍麻するせいで、そんな気風が自然になるとともに、仰ぎ見られるようになると思われます。また、青年期にみられると期待されるのは、するどい感受性、陽気さ、はつらつとした躍動感です。およそ人の興味をひく対象は、人生早期のういういしく何も仕込まれていない感覚器官にあざやかな印象を刻みやすく、経験上、そこから青年期の気風がうまれると期待されます。

しかし、これらふたつの各年代にいる人が、そこに属する特性を過剰にもつことは容易に起こります。青年期の色めきたった浮薄と老年期の凝り固まった無神経は、ひとしく見苦しいものです。俗諺によれば、青年の態度にどことなく老人の気風があるとき、あるいは、老人にどことなく青年の陽気さが残っているとき、その人はきわめて心地よいといわれます。しかし、青年が老人の気風を、あるいは、老人が青年の気風を、過剰にもつことは容易に起こります。極度の冷淡、退屈な紋切型は、老年期には容赦され

ますが、青年期にあれば、からかわれます。浮薄、そそっかしさ、見栄は、青年期には大目にみられますが、老年期にあれば、軽蔑されます。

5　わたしたちは慣習に誘導されて、身分や職業ごとに独自の人柄と気風を専用にあてがいますが、そんな人柄と気風は、おそらく、慣習から独立した適切さをもつことがあります。その場合、人びとの暮らしぶりはそれぞれ違っていても、その心を自然に動かすさまざまな事情をすべて考慮すれば、人柄と気風は、それ自体で是認される対象になります。

個人の態度が適切であるかどうかを決めるのは、彼の態度がその境遇にまつわるどれかひとつの事情に似つかわしいということではありません。それは、わたしたちが彼のことを親しく心に描くとき、自然に彼の注意を喚起するだろうと感じられるすべての事情に似つかわしいということです。彼の心が、そんな事情のどれかひとつに専念するあまり、ほかの事情をすっかり見過ごしていると映る場合、彼のふるまいは、その境遇にまつわるすべての事情とは適切にかみ合っておらず、完全には歩調を合わせられないものとして否認されます。しかしおそらく、人が情動を表すときに、主たる関心事を案じるだけで、それ以外のことには注意しなくてもよい場合、その情動は、わたしたちの全面的な共感ならびに是認の水準を超過しません。一人息子をなくした親が、悲痛と心やさしさを少しくらい私生活で露わにしても、非難はされないでしょう。しかし、軍の先頭にたつ司令官が、勝利して公共の安全を図るべく実に大きな注意を払わねばならないときに同じことをすれば許されないでしょう。

人びとの職種が違えば、ふだん折にふれて興味関心を占める対象も違うはずであり、しからば、習慣として自然に身についてくる情念も違うはずです。そして、とくにこの点に着目してさまざまな職種の人びとの境遇を親しく思い描くとき、わたしたちはつぎの事実に気づくにちがいありません。すなわち、およそ身に起こることがどれほど心を動かすかは、それが掻きたてる情動と、職業柄、心に定着した習慣や気性との波長が合うか合わないかに応じて、自然に強くもなれば弱くもなるということです。

人生の陽気な楽しみや娯楽に対して聖職者に期待される感受能力は、将官に期待されるそれと同じではありえません。世間の人びとを待ち受ける畏怖すべき来世を忘却せぬよう彼らに促すことが独自の仕事である人は、およそ義務の準則を逸脱すれば必ず至る結末を通告するのに適任であり、また、自身がきわめて厳密にその準則を遵奉する模範となるのに適任であって、こんな人こそ、

八九

軽々しくもよそよそしくも告知されてはならぬことの使者だと思われます。彼の心は、あまりにも壮大で厳粛なことに絶えず専念して、放蕩者や道楽者を夢中にさせる軽薄な対象が印象を刻む余地は残されていないと思われています。

ですから、わたしたちは、慣習から独立して、即座に、「慣習がこの職業に割りあてた気風には適切さがある」と感じ、また、「聖職者の態度に習慣として期待される人柄は、謹厳・禁欲・浮世離れした厳格さがもっとも似つかわしい」と感じます。以上の省察は、一目瞭然であって、どんなに気の回らない人でも、こんなことを少しは考えたことがあり、この身分団体にふだん見られる人柄を自分が是認する理由についてこんなふうに自問自答したことがあるでしょう。

6　聖職者以外で、その職ならではの見慣れた人柄が形成される理由は、さほど明瞭でなく、そのため、わたしたちがその人柄を是認する理由は、もっぱら習慣であって、この種の省察によっては補強されることも、あざやかによみがえることもありません。

たとえば、わたしたちが慣習に誘導されて軍人に結びつける人柄は、陽気、軽薄、はつらつとしたのびやかさ、そして、多少の放蕩好きです。それなのに、どんな心意気や気性が軍人の境遇にいちばんふさわしいかを考えようとすると、ものすごくきまじめで思慮深い性向こそ、軍人にいちばん似つかわしいとわたしたちは断定しがちです。なぜなら、彼らは、絶えず生命を異常な危険にさらし、それゆえ、死とそれがもたらす結果についてほかの人よりも絶えず思いつめている人たちなのですから。

しかし、まさしくこの事情は、そんな断定とは逆の性向が軍人に大いに広まる理由といってあながち間違いではありません。身じろぎせず集注して死の恐怖を窺うとき、それを克服するにはとても大きな努力が必要ですから、それに絶え間なくさらされる人びとの判断としては、そこから自分の考えをすっかりそらせたり、気兼ねのないくつろぎや些事にかかりきりになったり、この目的のためにありとあらゆる娯楽や放蕩に身をまかせたりするほうが気楽なのです。

戦陣は、思慮深い人や物思いにしずむ人をつくる要因ではありません。たしかに、そんな性格の人は、しばしば並々ならぬ決意を固め、大いに努力してどんなに避けがたい死に向かってもゆるぎない決心で邁進することができます。しかし、さほど緊迫してはいないが途切れることもない危険にさらされ、長期にわたって少しはそんな努力をしなければならない状況にあれば、心は消耗し、落ちこんで、どんな幸福や享楽も味わえなくなります。むしろ、陽気でのんきな人のほうが、まったく努力をしないですませ

られ、「前途を案じることはきっぱりやめ、打ちつづく楽しみと娯楽に興じ、自分の境遇に一喜一憂することはいっさい忘れよう」と、さっさと決心しますから、気楽にそんな状況に耐えるわけです。将官が、特殊な事情のせいで、異常な危険に陥る覚悟をしなくてすむとき、陽気に放蕩する傍若無人ぶりは、いつでもその人柄からなくなる傾向が強くあります。

通例、都市衛兵の隊長は、ほかの同類市民と同じく、聡明で、慎み深く、切り詰めて生きる人です。平和が長くつづくと、さきと同じ理由で、文民と軍人の人柄の違いは、ややもすると小さくなる傾向が強くあります。しかし、軍人の標準的な境遇のせいで、陽気で少しは放蕩好きであることが、彼らにあたりまえの人柄として定着し、さらに、慣習によって、わたしたちの想像では、この人柄とこの暮らしぶりは強固に結びついています。そのため、特殊な体質や境遇のせいで、そんな人柄を身につけられない人がいれば、わたしたちは見くだすきらいが強くあります。わたしたちは、都市衛兵の謹厳で慎み深い顔をみてからかいますが、それは、彼らの表情が軍人の顔とあまり似ていないからです。彼らは、身についた紀律正しい気風を自分でも恥ずかしがっているように思われることがよくあり、その生業ならではの流行におくれまいと、性懲りもなく軽薄さを装いますが、それは[平和に暮らす]彼らにとってけっして自然なものではありません。

見慣れてしまえば、尊敬すべき身分団体の人たちのどんな所作も、想像のなかでその団体としっかり連結されるようになり、わたしたちはその一方を目にするときにはいつだって、もう一方を目にするはずだと期待し、当てが外れると、見つけられると期待したものが不在であるのを残念に思います。ある人柄の持ちぬしが、わたしたちなら分類しそうにもなかった職種に属しているそぶりを堂々としてみせれば、わたしたちはとまどい、ことばに詰まり、どう呼びかければよいやらわかりません。

7　時代や国が違えば、その境遇もさまざまであって、職業の場合と同様、そこに暮らす大方の人びとにさまざまな人柄を授けます。そして、非難に値する資質にしろ、讃辞に値する資質にしろ、その具体的な水準にかかわる人びとの感情は、彼ら自身が生きる国や時代にふだん見られる水準に応じて違ってきます。おそらくロシアで高く評価される優雅なふるまいは、女々しいお追従と考えられるほどでなくてはなりませんが、フランス宮廷では、無骨で野蛮なものとみなされましょう。ポーランドの貴族にしてみれば、あまりにもけち臭い行儀と質素も、アムステルダムの市民にしてみれば、野方図でありましょう。

九一

どんな時代にも国にも、そこで暮らす人びとのあいだには敬愛される人たちがおり、そんな人たちにふだん見出されるべき各資質の水準こそ、当該の才覚や美徳の黄金比とみなされるものです。要するに、そんな人たちをとりまく事情の違いから、さまざまな資質が習慣になる度合いに強弱が生じ、これに応じて先の黄金比も違っているので、その結果、人柄と態度にそなわるべき正確な適切さについて人びとがいだく感情も違ってくるのです。

8　文明化された国民に培われるのは、克己心に基づく美徳、自己の諸情念を制御する力であるよりも、情け深さに基づく美徳です。無骨で未開の国民には、かなり違う事情があり、情け深さの美徳よりも、克己の美徳のほうが培われます。礼儀正しくみやびやかな時代にゆきわたる安全と幸福は、危険を見くだして辛抱づよく労働・飢え・痛みに耐える訓練の足しにはほとんどなりません。貧困はたやすく避けられ、したがってそれを見くだすことはほとんど美徳ではなくなります。楽しみをひかえることはさほど必要でなくなり、心はもっと自由に羽をのばし、苦しいときでも楽しいときでも自然に湧く志向にもっと自由にひたります。

9　野人や未開人には、かなり違う事情があります。野人はだれもが一種のスパルタ式鍛錬を受け、また、その境遇からいやおうなしに、ありとあらゆる試練に慣れて平気になります。野人は絶えず危険な状況にあり、たとえば、飢餓の極限状態にしばしばさらされ、食糧不足だけが原因で落命することもよくあります。野人はそんな環境にいるせいで、ありとあらゆる辛酸に慣れるばかりか、そんな辛酸が掻きたてがちなどんな情念にも屈するなかれと教わります。

野人は、そんな場合のひ弱さに対して同国人から共感されたり大目にみられたりすることを期待できません。わたしたちは、まず自分自身が多少とも心安らかでなければ、他人を案じて深く感じ入ることはできません。みずからの不幸によってぎりぎりの暮らしに追いつめられるなら、隣人の不幸を気づかう余裕はないでしょう。野人はみんなそうであって、その心は、自分に欠乏し必要な品々に専念するあまり、他人のぶんまで気づかうことがさほどできません。ですから、野人は、自分の味わう辛酸がどんな性格のものでも、まわりの人たちから共感されることを期待せず、そうであればこそ、うかつに弱音を吐いて心のうちを露呈することを潔しとしません。

野人の情念は、どんなに猛々しく荒れ狂うとも、表情の静けさ、ふるまいや態度の落ちつきを掻き乱すことはけっして許されません。報告によると、北アメリカの野人は、どんな場合にもこの上ない無関心を装い、愛や悲痛や憤りに少しでも負けていると映ったりしようものなら、面目がつぶれたと思うだろうといわれます。この点で、彼らの豪胆と自制心は、ほとんどヨーロッパ人の理解をこえています。

すべての人が身分と財産について対等な国では、結婚にさいして考慮されるのは、両性相互の志向だけで、それはいかなる制御にも服さずひたってよいと期待されるかもしれません。しかし、この北アメリカの国では、すべての結婚は例外なく両親によってお膳立てされ、若い男性が女性をえり好みするところを少しでも見せたり、結婚する時期と相手について極め付きの無関心を表さなかったりすれば、彼は一生の恥だと思うでしょう。愛からくる気弱さは、情け深くみやびやかな時代にはまことに深くひたってよいのに、野人のあいだではこれほど許しがたい女々しさはないと考えられます。両性は、結婚したあとでさえも、強い劣情の必然に基づく結合を恥じているように思われます。彼らは一緒に暮らさず、人目を盗んで逢うだけであり、ふたりとも、それぞれの父親の家に住みつづけます。ほかのすべての国では、両性が公然と同居することは許されて非難されないのに、この国では、これほど節度を欠き、男らしくない官能への耽溺はないと考えられます。

こうして彼らが絶対的な自制心をふるうのは、この心地よい情念に対してだけではありません。しばしば彼らは、同国人のみなが見ているまえで権利侵害、叱責、口ぎたない罵詈雑言にも耐え、その様子は、無神経も極まれりといった風で、みじんの憤りも表しません。

野人が戦争捕虜になれば、征服者から死刑判決を受けるのが通例ですが、判決を聞く野人はまったく情動を表さず、そのあと途方もなくおぞましい拷問をだまって受け、その間、わが身の上をかこつことはまるでなく、かいまみせる情念があるとすれば、敵への軽蔑だけです。とろとろ燃える炎の上に肩からつるされているあいだ、彼は拷問の執行役を嘲笑し、自分ならわが手に落ちた敵国人をどんなにずっとうまい手法で拷問するかを語ります。彼は、あぶられ、焼かれ、からだのいちばんやわらかく繊細な部分をえんえん数時間かけて残らずえぐり取られたあと、その不幸を長引かせるため、大抵、執行をしばし猶予されて火刑柱から降ろされます。すると、彼はこの小休止を使ってくだらないことばかりしゃべり、その国の情報をさぐり、自分の境遇以外なら何にで

九三

も関心があるといった様子です。

見物人の様子も同じく無神経であって、こんなに忌まわしいその光景が、彼らにはなんの印象も与えないように思われます。彼らは、拷問に手を貸すとき以外、捕虜にはほとんど見向きもせず、煙草をふかして、日常の時を楽しく過ごし、拷問などまるで進行していないかのようです。

野人はみな、このおぞましい結末にそなえてごく年少のころから覚悟を決めているといわれます。野人はこの目的のために、「辞世の歌」と呼ばれるものをつくります。この歌は、彼が敵の手に落ちて、敵の拷問にさいなまれながら息絶えてゆくときに歌うものとされています。その内容は、拷問の執行役への中傷であり、死と苦痛に対するこの上もない軽蔑を表現しています。彼は、あらゆる非常事態でこれを歌い、出征したり、戦場で敵に遭遇したり、要するに、「自分の想像力はどんなおぞましい非運にも馴染んでおり、人間界の出来事によって決意がひるんだり、翻意したりはしない」ということを示したくなれば、いつでもそれを歌います。

死と拷問に対する同様の軽蔑は、ほかのあらゆる野人の国民にも広くみられます。この点で、アフリカ沿岸からきた黒人奴隷はみな、そのあさましい主人の魂なんかに理解できなくて当り前の豪胆を、少しくらいは持ちあわせています。運命の女神は、そんな英雄ばかりの諸国民を、人も知るヨーロッパの監獄の塵中に苦しめたのですが、このときほどその覇権を人類にむごたらしくふるったことはありません。なぜなら、獄中のくずどもは、英雄らの生まれた国、そしておもむく国のいずれの美徳も持ちあわせず、その軽薄・粗暴・悪質なたちのせいで敗者の軽蔑にさらされるのがまことに当然だからです。(7)

10　こうした英雄の不屈の強靱な意志は、野人ならだれしも祖国の慣習と教育によって要求される一方、文明社会に生きるべく育てられる人びとには要求されません。文明社会の人びとは、苦痛を味わうとき苦情を述べたり、辛酸をなめるとき悲痛を訴えたり、あるいは、人目もはばからず、愛情に屈し、怒気によって平静を失ったりしても、簡単に赦されます。そんな気弱さは、彼らの人柄の本質的な部分に差し支えないと理解されているのです。われを忘れて人目もはばからず正義や情け深さにそむかないかぎり、たとえ表情の静けさ、口調や態度の落ちつきが、いくぶん険しくなり掻き乱されようとも、彼らの失う評判はほんのわずかにすぎ

ません。

情け深く洗練された人びとは、そんな他人の情念に比較的こまやかな神経をつかうので、高ぶり情熱的な態度にわりあいすばやく入りこめ、少しくらいの行き過ぎならわりあい簡単に赦せます。主たる当事者は、この点に気づいており、また、そんな人びとには裁判官としての衡平があると固く信じていますから、人目もはばからず情念を強めに表し、それでいて、そんな激しい情動のせいで彼らの軽蔑にさらされはすまいかとさほど恐れないのです。

わたしたちは、見ず知らずよりも友人の前でのほうが、思い切って情動を強く表せますが、その理由は、見ず知らずよりも友人のほうが大目にみてくれると期待するからです［I. i. 4. 9］。すると国民にも同様なことがいえ、文明化された国民同士の礼法は、未開の人びと同士で是認される水準以上に高ぶった態度を許容します。文明化された国民の社交には、友人同士の開けっ広げな感じがあり、未開の人びとの社交には、見ず知らず同士の遠慮があります。

フランス人とイタリア人は、大陸でいちばん洗練されたふたつの国民であり、彼らがおよそ興味をひかれる機会に胸のうちを表すとき、そこにこめる情動と躍動感は、それを知らない人にとって最初はおどろきです。これらの国民をたまたま旅行でおとずれている人や、彼らよりも感受性がにぶい世間で教育を受けてきて、この情熱的な態度に入りこめない人は、自国でそんな例をまったく見たことがなく、びっくりするわけです。若いフランス人貴族は、一連隊の指揮を任されなかったら、宮廷じゅうが見ている前でめそめそ泣くでしょう。修道院長デュ・ボスの所論では、イタリア人が二〇シリングの罰金刑を言いわたされるときに表す情動は、イングランド人が死刑判決を受けるときに示す情動よりも強烈なのだそうです。(8)

キケロは、ローマ人がもっともみやびやかであった時代だからこそ、元老院じゅうが見、そして全人民が見ている前で、面目をつぶさずに、痛恨の悲しみをたたえて涙を流せたのでしょう。それが、ほとんどすべての演説のあとにキケロがしていたにちがいない流儀であることは明らかです。ローマ初期の無骨な時代の雄弁家が、そんなに強い情動を込めて胸のうちを表したら、おそら

（7）スミスの経済学的観点からの奴隷制批判は、*WN* I. viii. 41 ; III. ii. 9 ; IV. ix. 47 を参照。

（8）Jean-Baptiste Du Bos（1670–1742）．参照箇所は不明。

くその時代の気風と相容れなかったはずです。わたしの考えでは、スキピオ家の時代、ラエリウス家の時代、老カトーの時代には、公衆が見ている前でそんなに強く心やさしさをさらけ出したら、自然にも適切さにも反するとみなされたでしょう。[9] こうした古代の戦士たちが胸のうちを表すときに許された手段は、行儀、謹厳、洞察力でした。しかし、格調高い情熱的な弁舌は、彼らに未知のものであったといわれます。この弁舌を最初にローマに持ちこんだのは、グラックス兄弟、クラッスス、スルピキウスであり、[10] それからほどなくキケロが生まれました。この高ぶる名調子は、フランスとイタリアの両国で長らく実践され、盛衰こもごもでしたが、つい最近、イングランドに持ちこまれはじめています。

文明化された国民と未開の国民では、こんなに大きくかけ離れた水準の自制心がそれぞれに要求され、ですから、同じように大きく異なった規準に照らして、態度の適切さも判断されます。

11　この［自制心の水準の］違いは、それに劣らず本質的な違いを数多もたらします。

洗練された人びとは、さきの自然の運動［苦痛、悲痛、愛情、怒気］に身をまかせることに多少とも慣れているせいで、気さくに心を開いて誠実な態度になります。これとは逆に、未開の人びとは、どんな感情の現れも封印・隠匿しなければならないせいで、どうしても本心をいつわり・偽装する、彼らならではの習慣を身につけます。野人の国民の事情に精通する人たちがそろって示す知見によれば、アジアでも、アフリカでも、アメリカでも、そんな国民はみな等しく頑固で、真実を隠そうという気になれば、どんな取調べでも彼らから真実を聞きだすことはできません。人目をくらますどんな尋問でも彼らをひっかけることはできません。拷問でさえも、彼らが言うまいと思えば、白状させることはできません。

また、その情念も野人ならではであって、外に向かう情動によってはけっして露わにならず、苦しむ当人の胸裏に隠れひそんでいますが、それにもかかわらず、ことごとく逆上の絶頂に達しています。彼は怒気の徴候をめったに見せませんが、いったん怒気に身をゆだねると、その仕置きはいつも血なまぐさく、おぞましいものです。ほんのわずかな見くびりさえも、彼を絶望のふちに立たせます。たしかに、その表情や口調は、あいかわらず聡明で落ちつきがあり、どこまでも完全な心穏やかさが表れるだけです。しかし、その行為は、しばしば激烈・横暴をきわめます。アメリカ北部の人びとのあいだでは、もっとも傷つきやすい年ごろの女

性が母親からちょっと叱られただけで入水することは珍しくなく、これもまた、顔色ひとつ変えずに無言で実行され、なにか言うとしても、「あなたは金輪際、娘をもつことはないでしょう」ということぐらいです。

文明化された国民の場合、人びとの情念はそんなに荒れ狂ったり、絶望的になったりしないのが普通です。彼らはしばしばうるさく、やかましくても、大きな危害を加えることはめったにありません。大抵、彼らの目的は、自分が激しく動揺するのも道理であることを観察者に確信してもらい、その共感と是認を手に入れて満足すること以外ではないと思われます。

12　しかし、こうした慣習と流行が、人類の道徳感情にもたらす効果は、それがほかの場合にもたらす効果に比べると、すべて取るに足りません。また、慣習と流行の原理がどんなにひどく判断をゆがめても、それは、人柄と態度の一般的な類型にかかわる判断ではなく、個々の具体的慣例の適否にかかわる判断です。

13　わたしたちは、「職業や暮らしぶりが違えば、そこに違った気風を是認すべし」と慣習から教わりますが、そんな気風がかかわるのは、きわめて大切な事柄というわけではありません。わたしたちは、うそをつかず、正義を守ることについては、老人からも青年からも、また、聖職者からも将官からも期待する一方、彼らの人柄をそれぞれ他から区別する目印については、些細な事柄のなかにしか探しません。また、この目印が見つかるにしても、観察から漏れた事情に着目すれば、業種ごとに割りあてるべしと

(9) Publius Cornelius Scipio Africanus Maior（236-183 BC）および養子縁組で孫にした Publius Cornelius Scipio Aemilianus, 'Africanus Minor'（c. 185-129 BC）は、ふたりともローマの執政官にして将軍であり、それぞれ、第二次ポエニ戦争と第三次ポエニ戦争の英雄であった。政治と戦争において彼らはそれぞれ、Gaius Laelius およびその息子 Gaius Laelius Sapiens と手を結んだ。両ガイウスも執政官にして将軍であったが、息子のほうは、キケロのいくつかの作品、とくに *De Amicitia* に登場する有名人である。Marcus Porcius Cato the elder（234-149 BC）は、紀元前一八四年にローマ監察官として厳しい取り締まりをして名をはせた。

(10) 年少のほうのスキピオとまったく同様に、これらの公人たちも、キケロがローマの偉大な弁論家について書いた論考 Brutus（46 BC）で論じられた。Tiberius Sempronius Gracchus（c. 164-33 BC；紀元前一三三年に護民官）、その弟 Gaius（d. 121 BC；紀元前一二三年および一二二年に護民官）、Lucius Licinius Crassus（140-91）および Publius Sulpicius Rufus（124-88 BC；紀元前八八年に護民官）。

慣習から教わっていた人柄でも、そこに慣習から独立した適切さがあると判明することはよくあります。ですから、この場合に、自然な感情がずいぶんひどくゆがんでいると苦情を述べることはできません。

国民が違えば、その国民ならではの気風がありますから、彼らが尊敬に値すると考える人柄は、資質が同じでも、その水準にはきっと違いが生じます。けれども、この場合でさえ、最悪の事態が起こるとしても、せいぜい、「時々、ある美徳の義務が張り出して、別の美徳の聖域に少しばかり食みだす」と言いうる程度です。おそらく、ポーランド人のあいだに流行している田舎風のもてなしは、家計と行儀を少しばかり虫食み、また、オランダで敬意を払われる質素な暮らしは、高潔無私と友愛を少しばかり蚕食します。

野人に要求される忍耐強さは、彼らの情け深さを減退させます。また、おそらく、文明化された国民に要求される神経のこまやかさは、男らしい不撓不屈の人柄を台なしにすることがあります。一般に、国民のなかに成立する気風の類型は、全体としてみれば、その国民の境遇にきわめて似つかわしいといってふつうはさしつかえありません。忍耐の強さは、野人の環境にきわめて似つかわしい人柄であり、神経のこまやかさは、高度な文明社会の住人の環境にきわめて似つかわしい人柄です。ですから、この場合でさえ、人間の道徳感情がずいぶんひどくゆがめられていると苦情を述べることはできません。

14　したがって、慣習が、行為の自然な適切さにもとるどんな非道を正当化するにしても、それは、ふるまいや態度の一般的な類型にはかかわりません。個々の具体的慣例についていえば、慣習の影響は、しばしば善良な習俗にずっと深刻な害をもたらします。要するに、個々の具体的行為については、どんなに明白な正邪の原理をおびやかす行為であっても、慣習はこれを適法で非難に値しない例として確立することができます。

15　たとえば、幼子に危害を加えることよりもひどく野蛮なことがありうるでしょうか。幼子がいたいけで、あとけなく、いとおしいことを思えば、敵だっていたわりの気もちを呼び覚まされるのであって、その年端もゆかぬ子どもさえ容赦しないのは、激高する残忍な征服者が逆上の果てにようやくなしうる所業と考えられます。すると、逆上した敵でさえも侵すことをためらうひ弱な

身の上を侵害できる親がいるとすれば、その胸のうちは想像を絶するのではないでしょうか。[11]

それなのに、子捨て、すなわち、嬰児殺は、ギリシャのほとんどすべての都市国家で許されていた慣行であり、みやびやかで開化したアテネ人にさえも見られました。親をとりまく事情から子の養育が不都合になると、いつでも子を遺棄し、餓死させても野獣のえじきにしても、非難や譴責の目でみられることはありませんでした。この慣行の始まりは、おそらく、殺伐きわまる野蛮な時代だったのでしょう。人びとの想像力は、そんな社会の黎明期に初めてこの慣行に馴染み、この慣習が旧態依然として継続したせいで、後世はその凶悪性を認識できずにいました。

わたしたちはこんにち、この慣行が野人の諸国民すべてで盛んにおこなわれている事実を認めます。そして、社会がそのようにきわめて粗野で未発達な状態にあれば、ほかのどんな状態にあるときより、子捨ては容赦されるべしということも疑いありません。野人が味わう極限の窮乏とは、親自身も餓死の瀬戸際にひんぱんに立たされるとか、純粋に食糧不足で頻々といのちを落とすとか、しばしば親子ともども食いつないでゆけないとか、大抵がこんな状態です。したがって、そんな場合に野人が子を遺棄するとしても不可解ではありません。また、抵抗不可能な敵から逃げるさい、足手まといになるので幼子を置き去りにする人がいても、弁明の余地はきっとあるでしょう。なぜなら、彼が子の助命を試みることから望めるのは、子と一緒に死んで慰められることしかないからです。ですから、社会がこんな状態のときには子の養育ができるかどうかの判定を親にまかせるべしと言われても、わたしたちはさほど驚かないにちがいありません。

しかし、もっとあとの時代のギリシャでも、同じ所業は、さし迫ってもいない利益や便宜を図る了見から許されました。しかしそれは、到底、子捨てを弁護する理由たりえませんでした。間断なくつづいた慣習は、このときまでにこの慣行を、徹頭徹尾、正当化していましたから、世間のいいかげんな処世訓が、この野蛮な特権に寛大であったばかりか、もっと正当かつ精密でなくてはならなかった哲学者の学説までもが、この既定の慣習に誘導されて正道を逸れました。その学説は、このときもほかの多くの場合と同じく、「公共の役に立つ」という趣意の理由をあれこれこじつけて、この特権の忌まわしい濫用を譴責もせず、支持しました。

(11) *LJ*(A) iii. 78ff 参照。

アリストテレスはこの特権について、政権担当者が多くの機会に奨励すべきものであると論じています。情け深いプラトンも同じ意見であり、彼の全著作は、人間愛から英気をえているように思われるのに、この慣行を否認すると明言した箇所はどこにもありません。(12)

慣習が、情け深さにそむくそんなおぞましい行為を承認できるのなら、「どんなにひどい個々の具体的慣行でも、慣習が正当化できないものはほとんどない」とわたしたちが想像するのも無理はありません。「そんなことは世間一般でおこなわれているよ」と人びとが毎日口にしているのをわたしたちは耳にしますし、そのように言いさえすれば、ふるまいそれ自体がどんなに不正で筋の通らないものでも、その弁明になると人びとは考えるように思われます。

16　ふるまいや態度の一般的な類型と特徴についていだく感情は、慣習のせいでゆがむとしても、そのゆがみ具合は、個々の具体的慣例の適切さや不適法性についていだく感情の場合とけっして同じではありません。それには明白な理由があります。そんな慣習などありえないのです。もし人間のふるまいと態度のふだんの調子が、たった今わたしの言及した忌まわしい慣行と同じならば、そんな社会は片時も生きながらえることができますまい。

（やまもと・よういち　法学部教授）

(12) Aristotle, *Politics*, VII. 16, 1335b20-1 ; Plato, *Republic*, V. 460c.